

第 228 次調查

例　言

1. 本章は早良区有田1丁目11-9の個人専用住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助事業で実施した有田遺跡群第228次調査の発掘調査報告である。
2. 発掘調査と整理報告は森本幹彦が担当した。遺構の実測、撮影、製図は森本が行った。遺物の実測・製図は担当者のほか、Fig.6のSU出土弥生時代前期土器について、松尾奈緒子(埋蔵文化財第1課)が実測、製図、報告記述を行った。
3. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。別途、周辺の公園内や道路の基準点より国土座標(日本測地系)を測量した。本書で用いている方位記号は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏している。
4. 遺構の略号は、貯蔵穴をSU、(竪穴)住居址をSC、掘立柱建物をSB、柵列をSA、溝をSD、柱穴等をSPとしている。

調査基本情報

有田遺跡群 第228次調査		遺跡調査番号	0814
地　　番	福岡市早良区有田1丁目11-9	遺　　跡　　略　　号	ART-228
分布地図番号	82原	調　　査　　面　　積	71m ²
調　　査　　期　　間	平成20年6月2日～平成20年6月11日		

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

2008年5月2日付けで吉永隆氏より福岡市教育委員会宛に、早良区有田1丁目11番9号（敷地面積159.12m²）における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群内であり、2008年5月20日に埋蔵文化財第1課事前審査係で試掘調査したところ遺構の存在が確認された。この試掘成果をもとに協議を行った結果、建設工事にあたって鋼管杭の打設や地下下げの必要があり、遺構の破壊を回避できないことから、記録保存のための本調査を国庫補助事業として実施することになった。ただし現地形や試掘調査の成果から、敷地南半部についてはすでに切り下げられており、遺構が失われていることから、敷地内北半部の71m²を調査対象とした。平成20年6月2日から6月11日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成21年度に行なった。

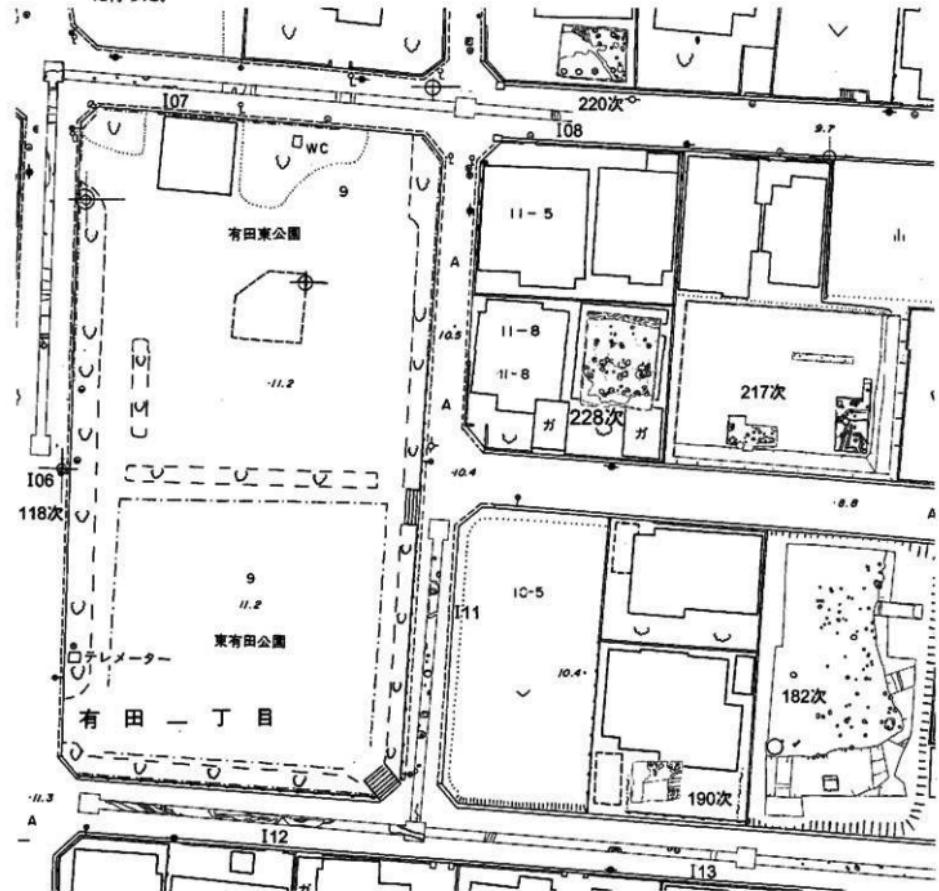


Fig. 1 228次調査地点周辺 (1/500)

第228次調査

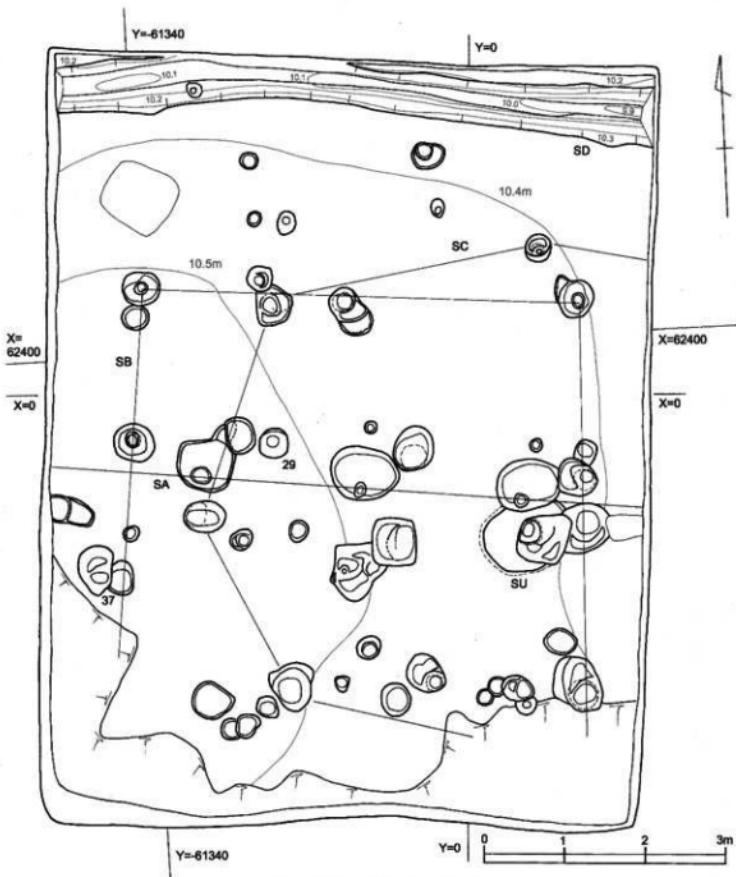


Fig. 2 調査区全体図 (1/60)

(2) 調査組織

調査委託 吉永隆

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課 課長 田中寿夫

調査第1係長 杉山富雄

庶務担当 文化財管理課 管理係 古賀とも子 井上幸江(前任)

事前協議 埋蔵文化財第1課 事前審査係長 宮井善郎 吉留秀敏(前任)

事前審査係 木下博文 阿部泰之(前任)

調査担当 埋蔵文化財第2課 調査第2係 森本幹彦

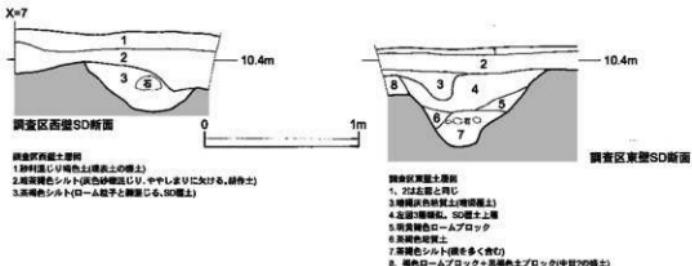


Fig. 3 調査区西壁と東壁の土層 (SD断面 1/30)

2. 調査の概要

228次調査地点は有田遺跡群の東部に位置する。近辺ではFig 1 のような調査が行われているが、遺跡群の中では調査が少ない地区である。遺構面は宅地表土下20 cm前後で検出できる地山(褐色～黄褐色粘質土=鳥栖ローム層下部)で、標高10.4m前後を測る。調査区内の西部が高く、北東に向けてゆるやかに低くなる(Fig.2、3)地形である。調査区北端部では一部、中世頃の盛土がみられる(Fig 3 調査区東壁 8 層)。

遺構密度は高くないが、弥生時代前期の貯蔵穴1基、弥生時代中期のピット多数(削平を受けた堅穴住居)、古墳時代末～古代の掘立柱建物1軒以上と1本柱櫛列1条、戦国時代の溝1条、といった各時代の遺構がみつかった。遺物はコンテナケース3箱程度の量であるが、上記時代のもののほか、縄文時代後期の剥片鐵が出土している。

3. 遺構

(1) 弥生時代前期の貯蔵穴 (SU) (Fig.4)

長1.2m幅0.8m深0.15mを測る。平面プランが長楕円形、断面がフラスコ形と、弥生時代の貯蔵穴とされるものに通有の形態である。覆土は黒褐色シルトを主体とするもので、少量の礫を含む。壁際は地山の崩落・流入によるものと思われるロームブロックが多く含まれる。

弥生時代中期や古代のピットなどに切られており、遺構の遺存状況は悪いが、板付II a式の甕2個体分以上と手捏ね土器1個体が一括出土した(Fig. 6)。底面直上で直立している個体もあり、遺構の埋没過程での二次的な移動はあるものの、本来は遺構表面上に並べ置かれていたものであろう。

貯蔵穴の元々の深さは数mに達すると考えられるが、本例は深さ15cmしか遺存していない。これを切る弥生時代中期の柱穴(SP22)が深さ80cm以上あるので、弥生時代中期以降の地下げの繰り返しの中、かろうじて遺存したものと考えられる。周辺では消失した弥生時代前期の貯蔵穴も少なくないであろう。

(2) 弥生時代中期の住居址 (SC) (Fig. 5)

検出した弥生時代中期のピットはFig 5のような柱穴配置となっており、削平を受けた直径9 m前後の円形堅穴住居を想定することができる。SP20、22、26、27などが住居中央付近の主柱であり、その周囲のピットが住居内の外周を巡る円形または多角形配置の柱穴になると考へられる。柱穴の重複からみて、住居の建替えか、複数の住居の切り合いがあったとみられる。図示した多角形配置の柱穴は主柱とみられるSP20か22とセットになるものであろう。ピットの覆土は黒褐色～暗褐色のシルト

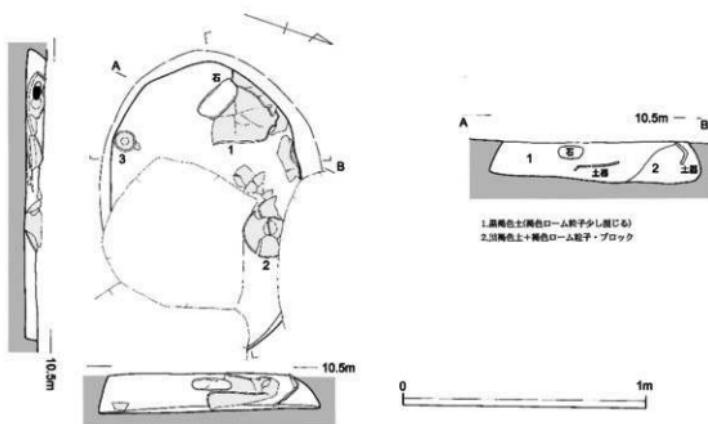


Fig. 4 SU実測図 (1/20)

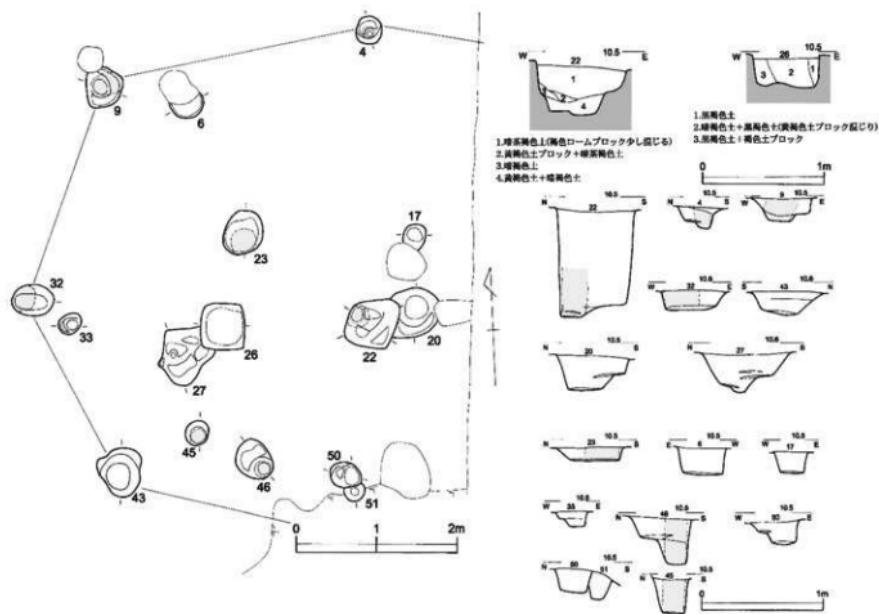


Fig. 5 SC実測図 (1/60, 1/40)

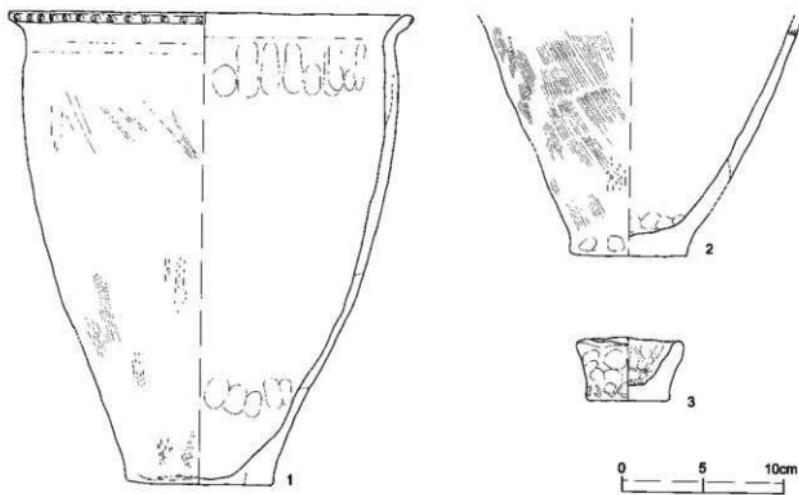


Fig. 6 SU出土土器実測図 (1/3)

を主体とするもので柱痕のあるものが少くない。主柱とみられるピットは辺(径)60cm前後、深さ25~80cm前後、外周柱とみられるピットは径40cm前後、深さ20~40cm前後である。ピットから出土した弥生時代中期の土器は中期初頭の城ノ越式から中期前半の須玖Ⅰ式までの時期幅である (Fig. 9 1~12)。前述の通り、弥生前期の貯蔵穴の遺存状況から、SCにともなう竪穴の掘削とあわせて、中期段階の集落形成のための地下げが行われたと考えられる。

(3) 古墳時代後期～古代の建物

建物を抽出することができたSB、SAは後述のように7世紀後半以降のものであるが、6世紀代の須恵器も散見されるので、ピットの幾つかは古墳時代後期の建物に伴うものと考えられる。

①掘立柱建物 (SB) (Fig. 7)

古墳時代後期～古代の柱穴（覆土は黒褐色～暗褐色シルト）のうち、建物を復元することができたのはSBとして図示したもののみである。後述の7世紀後半とみられる柵列SAを切っている。

検出したのは建物の一部であるが、2間×3間の南北方向の側柱建物である可能性が高いであろう。主軸は磁北より東に3°振れている。ピットの掘り方は径40~60cm前後、深さ30~50cm前後である。柱間は2~2.9m、柱径は20cm前後である。

②柵列 (SA) (Fig. 8)

平面プランが梢円形で、南寄りのところに柱の掘り込みを有する特徴的なピットが東西方向に3基並んでおり、1本柱の柵列と考えられる。直交軸が磁北より東に5°振れており正方位に近い。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土、遺構面で柱痕はみえなかった。ピットの掘り方は径80cm×65cm前後、深さ20cm前後である。柱は径が15cm前後で柱間が1.95mである。この柱間なら、調査区西端にもピットの掘り方がかかっていてもよさそうであるが、みつからなかった。

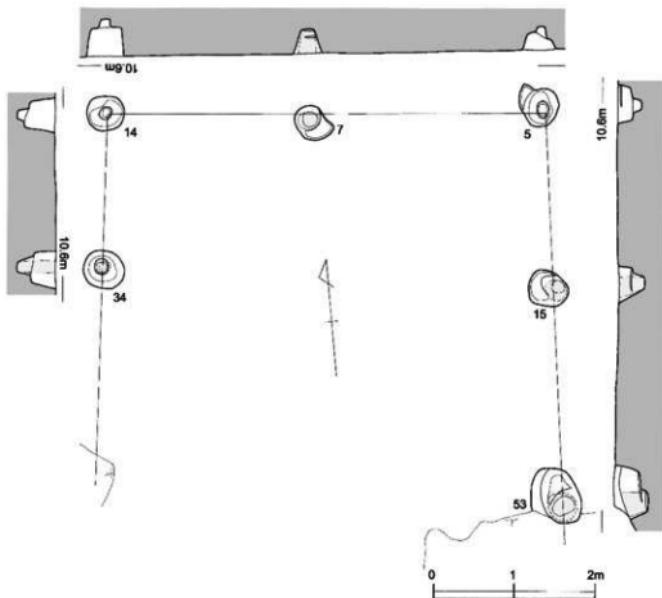


Fig. 7 SB実測図 (1/60)

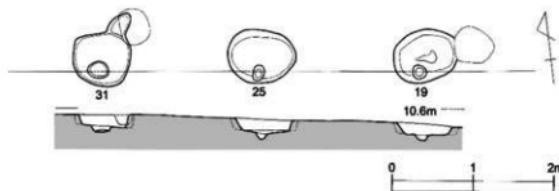


Fig. 8 SA実測図 (1/60)

ここで柱列が途切れるのか、柱間が長くなる出入り口のような箇所になるのか、定かではない。出土遺物にはFig 9-14のような小田富士雄氏編年VI期、7世紀後半とみられる須恵器が出土しており、造構の時期に近いものと考えられる。

(4) 戦国時代の溝 (SD) (Fig. 2, 3)

調査区北端部で検出された東西方向の直線的な溝で、周辺の現在の地割方向に近いものである。幅70~90cm前後、深さ30~50cm前後の小規模な溝で、底面の標高は西部で約10.1m、東部で約9.9m

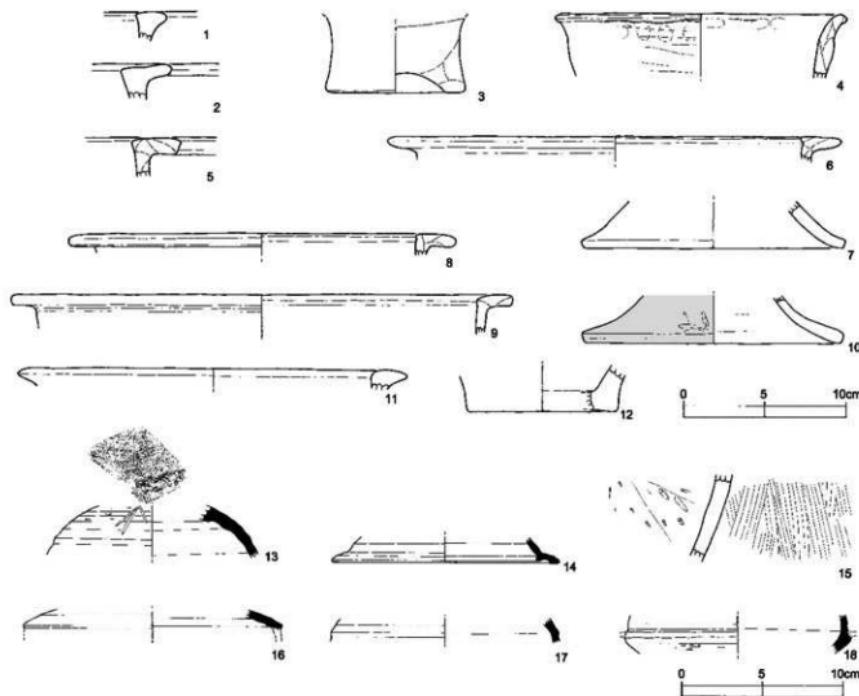


Fig. 9 SC, SB, SA等出土土器実測図 (1/3)

である。覆土は茶褐色シルトを主体としており、下層上部に礫や遺物を多く含む。出土遺物はFig10のような16世紀前後とみられる瓦質の足鍋や摺り鉢、瓦、砥石などである。

SDは、西から東に導水する水路や区画としての機能が考えられるが、当該期の遺構が調査区内で他にみられないことから、周辺は道路に当たる可能性も考えられる。

4. 出土遺物

(1) 弥生時代前期の土器 (Fig. 6)

1の甕は胴部下半からゆるやかにふくらみ、最大径は胴部上半にある。口縁端部はまるくおさめ、ほぼ全面に近い範囲に工具による刻目を施している。縦ハケを全面に施した後、工具によるナデ消しを行っており、丁寧なつくりといえる。2の甕は貯蔵穴底面で直立して出土した。1と異なり底部からゆるやかに開く器形であり、器壁も厚い。3は、手捏ねの鉢で、胎土は1、2より精緻である。

出土した器種が限られたため時期をしぶることは難しいが、以上のような土器の特徴から板付II a式段階においても古相にあたると考えられる。

(2)弥生時代中期の土器 (Fig. 9 – 1 ~12)

1~10はSCに関連するビット出土で、11、12は古墳時代後期以降のビットSP37出土である。1~4がSP22出土、5~7がSP26出土、8・9がSP9出土、10がSP32出土である。1~4、11が中期初頭の城ノ越式、5~10・12が中期前半の須玖I式とみられる。4の鉢は粘土紐の貼り付けにより突出する口縁部を有し、外面を平滑にナデ調整している。10は丹塗りの高杯脚部である。本調査区からは3点の丹塗り土器片(壺、高杯)が出土しているが、須玖I式段階のものであろう。

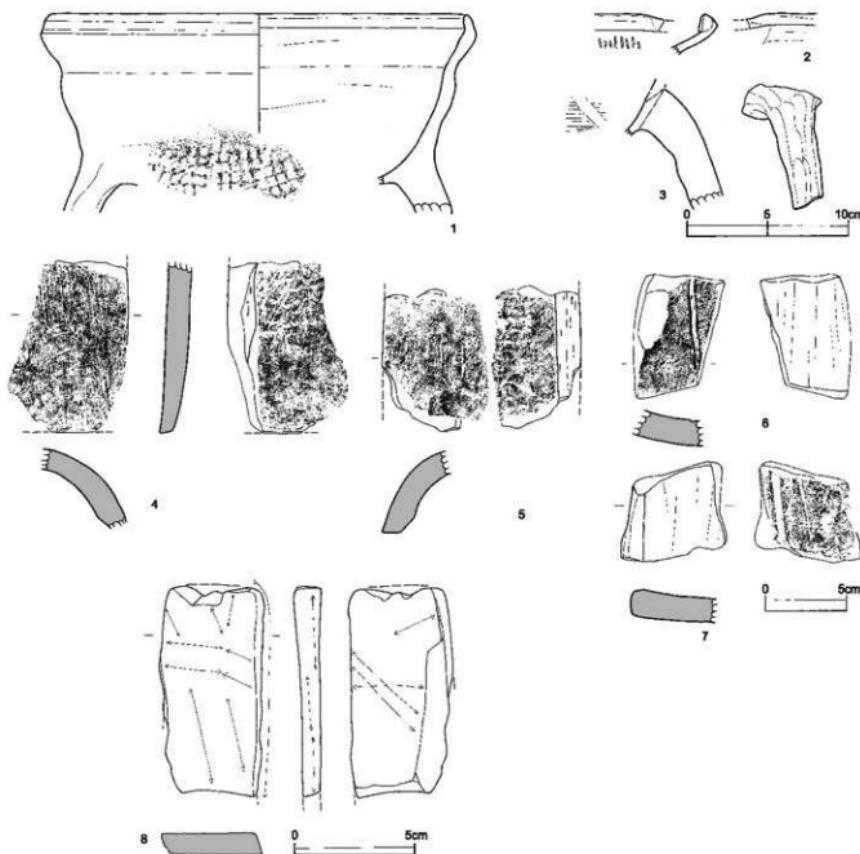


Fig. 10 SD出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

(3)石器 (Fig.11)

いずれも腰岳産とみられる黒曜石の石器である。1はSP22出土の縄文時代後期頃の剥片鎌、2はSP9出土のクサビ状石核、3はSP22出土のスクレーパー、4はSP45出土のスクレーパーである。3・4は弥生時代のものとみられる不定形な剥片石器であり、2の石核からは不定形な小型の剥片石器が作出される。これらの他に弥生時代の黒曜石剥片とみられるものは22点36g出土している。

(4)古墳時代後期～古代の土器 (Fig. 9-13~18)

13はSP34(SB)出土の古墳時代後期後半以降の須恵器蓋である。天井部にヘラ記号を有するが、欠損しており完全形ではない。14はSP19(SA)出土の須恵器蓋小片、15はSP31(SA)出土の土師器體部である。14は小片であるため、径や傾きに不安があるが、VII期の須恵器とみられる。13はこれより古手であるが、SAを切るSBの柱穴の一つから出土しており、混入とみるべきかもしれない。16(SP29)、17・18(SP29)のように周辺からは6世紀代の須恵器蓋杯も出土している。

(5)戦国時代の遺物 (Fig.10)

いずれもSD出土である。1・3は瓦質の足錆である。内外面ナデ調整するが、外面体部下半部には粗い格子目タタキを残す。2は瓦質の摺り鉢口縁部片で、片口にかかる部分である。陶磁器類の出土はなかった。

4・5は丸瓦、6・7は平瓦である。丸瓦は凸面に縄文タタキ、凹面に布目を残し、広端部付近を中心ナデやケズリ調整を施す。平瓦では6の凹面に紐の圧痕や離砂を残している。8は粘板岩製の砥石である。

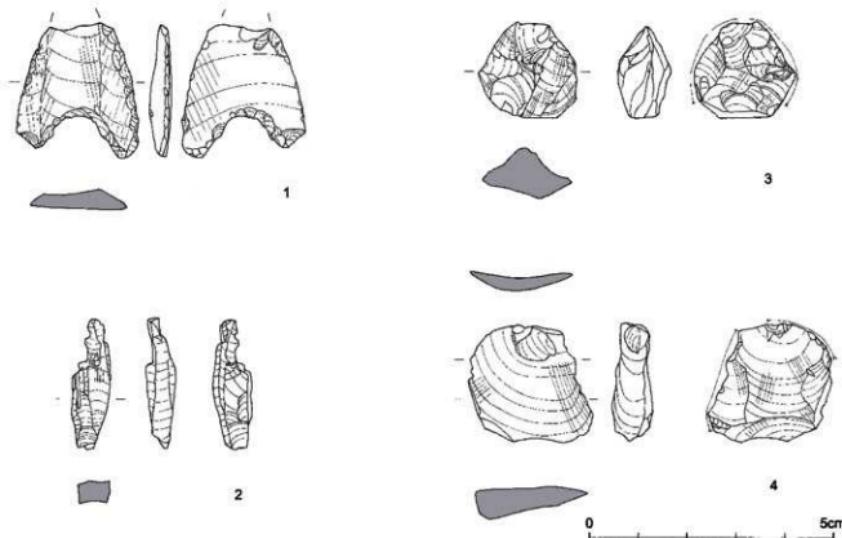


Fig. 11 石器実測図 (1/1)

5. まとめ

228次調査区は弥生時代前期の環濠集落や古代の官衙域からは少し外れるが、それらの時期の遺構を含む各時代の遺構や遺物がみつかった。

弥生時代前期の貯蔵穴からは板付IIa式の一括資料が出土した。また、遺構の遺存状況から弥生時代中期前半までの集落形成のために大規模な地下げが行われたことを推定することができた。本調査区周辺でも前期の貯蔵穴が散見されるが、後世の削平により消失したものも少なくないであろう。

7世紀後半の東西方向の一本柱櫛列は約30m北に位置する220次調査地点でみつかった東西方向の柱穴列と一連の区画を形成する可能性がある(Fig.12)。これまで注目されてきた官衙域からは東に外れるが(128ページ、コラム参照)、今後周辺での調査に際しては当該期の建物や柱穴列に注意が必要である。

戦国時代の遺構は調査区北部で東西方向の溝が1条検出されたのみである。182次調査など、周辺では当該期の居館の区画をなす方形溝などがみつかっており、屋敷地が展開していたと考えられるが、本調査区はその遺構密度の薄さから溝の南側が当該期の道路に当たる可能性も考えられる。

このように本調査区は狭い面積ながらも、比較的調査の少ない有田跡群東部の様相を知る上で重要な成果をもたらしたといえよう。

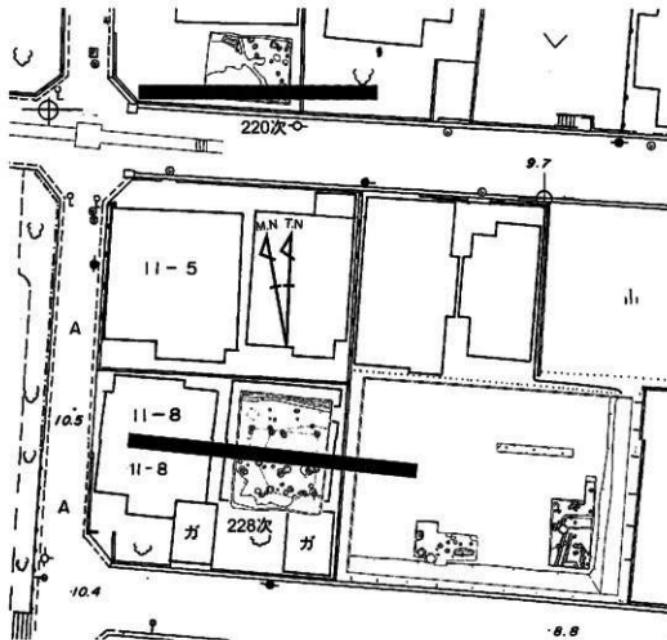


Fig. 12 220次と228次の櫛とみられる柱穴列 (1/400)



Ph. 1 調査区全景（南から）



Ph. 2 SU (東から)



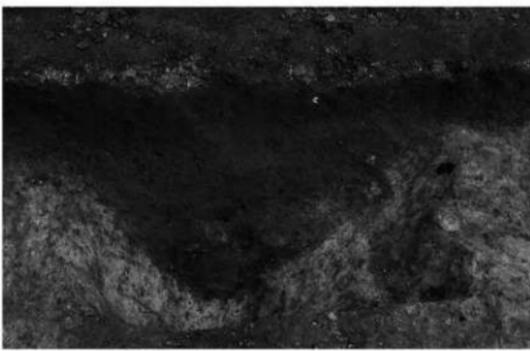
Ph. 3 SU土層堆積 (東から)



Ph. 4 SA (東から)



Ph. 5 SD (東から)



Ph. 6 調査区東壁SD断面 (西から)



Ph. 7 SU出土弥生土器



Ph. 8 SD出土瓦質足鍋



Ph. 9 剥片鐵

第 229 次調查

例　言

1. 本章は早良区小田部1丁目177-4の個人専用住宅建設に伴い、福岡市教育委員会が国庫補助事業で実施した有田遺跡群第229次調査の発掘調査報告である。
2. 発掘調査と整理報告の担当は森本幹彦である。発掘調査において板倉有大(埋蔵文化財第2課)の協力を得た。
3. 調査の基準座標は調査区の形態に合わせた任意のものである。別途、周辺の道路に設置されている基準点より国土座標(日本測地系)を測量した。本書で用いている方位記号は磁北で、真北より $6^{\circ} 20'$ 西偏している。

調査基本情報

有田遺跡群 第229次調査		遺跡調査番号	0816
地　　番	福岡市早良区小田部1丁目177-4	遺　　跡　　略　　号	ART-229
分布地図番号	82　原	調　　査　　面　　積	26m ²
調　　査　　期　　間			平成20年6月16日～平成20年6月20日

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

2008年5月12日付けで井上純夫氏より福岡市教育委員会宛に、早良区小田部1丁目177番4号（敷地面積154.87m²）における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会がなされた。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群内であり、2008年5月29日に埋蔵文化財第1課事前審査係で試掘調査したところ遺構の存在が確認された。この試掘成果をもとに協議を行った結果、建設工事の掘削によって遺構が破壊される車庫部分のみについて記録保存のための本調査を国庫補助事業として実施することになった。調査対象は敷地の東部26m²である。平成20年6月16日から6月20日まで発掘調査を実施した。整理作業は平成21年度に行った。



Fig. 1 229次調査地点周辺 (1/500)

第229次調査

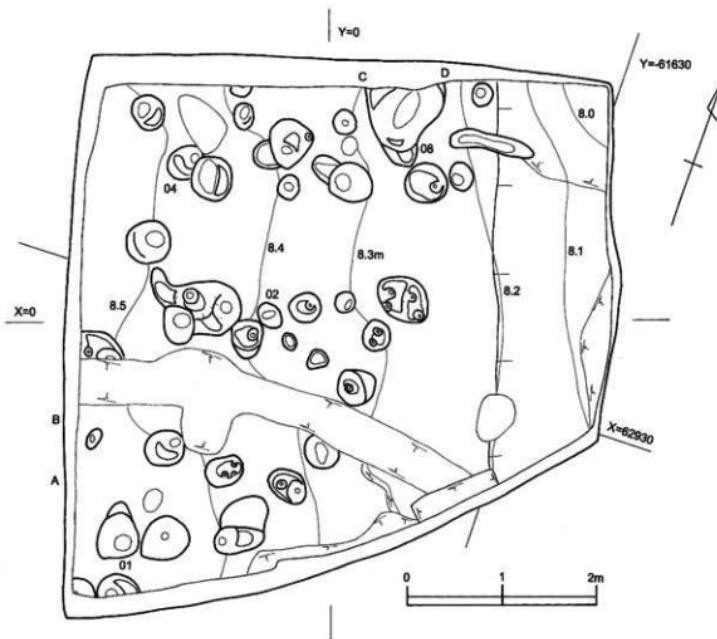


Fig. 2 調査区全体図 (1/50)

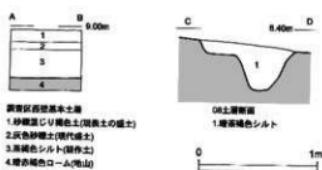


Fig. 3 土層図 (1/40)



Fig. 4 出土須恵器実測図 (1/3)

(2) 調査組織

調査委託 井上純夫

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

埋蔵文化財第2課	課長	田中寿夫
	調査第1係長	杉山富雄
庶務担当	文化財管理課	管理係 古賀とも子 井上幸江（前任）
事前協議	埋蔵文化財第1課	事前審査係長 宮井善郎 吉留秀敏（前任）
		事前審査係 木下博文 阿部泰之（前任）
調査担当	埋蔵文化財第2課	調査第2係 森本幹彦

2. 調査の概要

229次調査地点は有田遺跡群の北部に位置する。北西から南東方向に入る小さな谷に面する東斜面である。地目は宅地であり、表土は地表下15cm前後の宅地の盛土と、その下25cm前後の畑の耕作土である。近所の方の話によると、宅地以前は植木屋の植林があったとのことである。遺構面は暗赤褐色粘質土(鳥栖ローム上部)で、標高8.0m弱から8.5m強、東から西に向かって高くなる地形である。遺構はピットを38基検出したが、底面などの掘り方が不整のものは、植樹にともなう穴や根穴とみられる。

3. 遺構

ピットは径40～50cm前後、深さ30cm前後のものが多く、覆土は茶褐色～暗褐色のシルトが主体である。SP08は他よりも大きく、径80cm、深さ40cmを測る。また、ピット群から掘立柱建物などの建物を復元することはできなかった。ピット出土遺物は古墳時代～古代の土師器、須恵器、鉄滓であるが、遺構の時期は覆土の様相から中世以降に下るかもしれない。

4. 遺物

遺物はピットから出土しているが、Sサイズ7袋分である。古墳時代～古代の土師器、須恵器、鉄滓であり、中世以降といえる遺物はみられなかった。Fig.4はSP04出土の須恵器小片で、その器形と傾きから無蓋高杯の杯部とみられる。須恵器はこれのみで、他は土師器片が4基のピットから出土している。鉄滓はSP01出土の流出滓11gとSP02出土の鍛冶滓15gの2点である。

5. まとめ

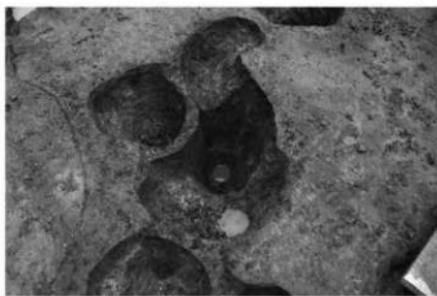
有田遺跡群の北部に位置する229次調査地点は北西から南東方向に入る谷に面する東斜面に位置する。ピットを多数検出したが、調査区が狭小で遺物も極少量のため、その時期や性格を明らかにすることはできなかった。遺物は古墳時代～古代とみられるが、ピットの覆土の様相から、より新しい時期のものである可能性が高いと考えられる。



Ph. 1 調査区全景（西から）



Ph. 2 08周辺（南から）



Ph. 3 調査区西部ピット群（東から）

第 231 次調查

例　言

1. 本書は個人住宅建設に伴い、福岡市早良区小田部1丁目216-1において実施した有田遺跡第231次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものとに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット　S P　掘立柱建物　S B
3. 遺構の実測は木下博文のほか以下の者が行った。
梅野貴澄　辻節子　三谷朗子
4. 遺構の写真撮影は木下博文が行った。
5. 製図は木下博文が行った。
6. 本書で用いた方位は磁北で、真北から6°21'西偏している。
7. 本調査における出土遺物ならびに図面・写真等の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵され、管理・公開される。
8. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査基本情報

調査番号	0848	遺跡略号	ART-231	分布地図番号	081	室見	0309
所在地	福岡市早良区小田部1丁目216-1	事前審査番号	20-2-536				
申請地面積	222.09m ²	調査対象面積	80.61m ²	調査面積	80.61m ²		
調査期間	2008.10.29～11.10						

1. はじめに

(1) 調査に至る経緯

平成20（2008）年10月3日、甲斐知氏より、福岡市教育委員会宛に、福岡市早良区小田部1-216-1における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無について照会があった（申請番号20-2-536）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群の範囲内に含まれることから、試掘調査を10月14日に行った。その結果現地表面下35cmで遺構を検出した。設計変更が不可ということで、発掘調査を行うこととなった。

本調査は平成20（2009）年10月29日に着手し、11月10日に終了した。調査経費は全額国庫補助金を適用している。

(2) 調査体制（当時）

申請者 甲斐知

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第2課

調査総括 埋蔵文化財第2課長 田中寿夫

調査第1係長 杉山富雄

調査庶務 文化財管理課管理係 井上幸江

事前審査 埋蔵文化財第1課事前審査係 阿部泰之

調査担当 埋蔵文化財第2課調査第2係 木下博文

調査作業 梅野眞澄 木田ひろ子 辻節子 徳永洋二郎 松本順子 三谷朗子

2. 調査の記録

(1) 調査区の位置と調査の概要 (Fig.1・2、Ph. 1)

調査地点は原北中学校の南東、標高7.9m程度の丘陵上に位置し、遺跡の北端部に近い。調査地点から西および北へは地形が落ちる。周囲は宅地化が進み、発掘調査が行われている。道路を挟んだ南隣では138・151次、北東隣では63・79次、1軒挟んだ東側では26次調査が実施されている。

現地表下30cmの黄褐色ローム質土上で遺構を検出した。遺構面までの堆積土は客土のみで、遺物包含層はない。遺構面は搅乱が多く、重機の爪痕が残っており、荒れた状態であった。辛うじて消失を免れた黒褐色粘質土を覆土とするピットを大小含めて、42基検出した。中には柱痕があり深さ95cmに及ぶものもあるが、有効な柱穴列を見出せず、掘立柱建物は一間四方1棟を復元するに留まった。出土遺物は、土師器の微細片および黒曜石剥片数点のみである。

(2) 遺構と遺物

掘立柱建物

S B 0 1 (Fig.3、Ph.2)

調査区北東隅で検出した。一間四方で柱間寸法は南北2.0m、東西2.1mと、東西がやや長い。ピットの深さは11~25cmである。建物主軸はほぼ磁北である。出土遺物はSP01・02より土師器小片が出土したのみで、時期は不明確である。

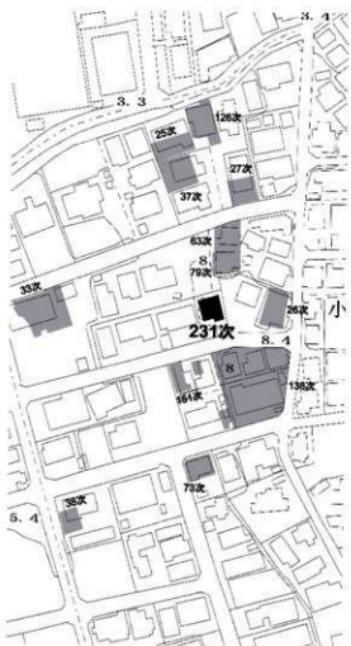


Fig.1 調査地点の位置 (1/2000)

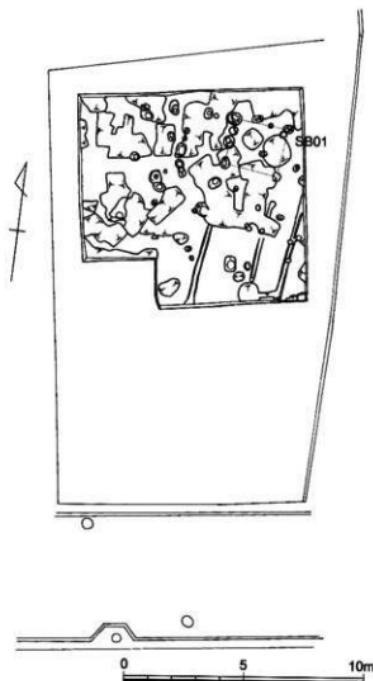


Fig.2 調査区平面図 (1/200)

3. まとめ

ピットは調査区の北東寄りに多く、調査区北東隣の63・79次調査地点で検出されている掘立柱建物群と関連を持っており、今回提示したSB01も東もしくは北へ延びる可能性がある。遺物が僅少で時期も明確ではないが、埋土の特徴から古代に遡るものか。ピットの中には深さが1m、柱痕を持つものもあるが、概して浅く、相当削平を受けているものとみられる。

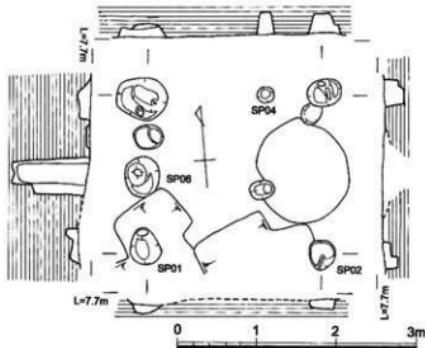


Fig.3 S B01平面図 (1/60)



Ph.1 調査区全景（南から）



Ph.2 S B 01 (北から)

有田遺跡群は、ミヤケ(屯倉、官家)と考えられる古墳時代後期前後の倉庫群から奈良時代前後の早良郡衙までの変遷をほぼ連続的に追うことができる重要な遺跡である。Fig.は米倉秀紀氏による有田遺跡群187次調査報告の「早良郡衙関連遺構配置図」を元に遺跡群東部や近年の関連調査を加えて作成したものである。米倉氏を始めとするこれまでの研究によれば、A群(総柱建物倉庫群+1本柱櫛列／133次や181次周辺／6世紀前半代から?)→B群(総柱建物倉庫群+3本柱櫛列／6次周辺や107次周辺など遺跡群内に約8ヶ所／6世紀末～7世紀前半)→C1・C2群(124次より南に伸びる溝を境として西方建物と東方建物に分かれ、西方建物は総柱建物倉庫を主体とする郡衙正倉)と郡庁(189次)→D群(四方を溝で区画された側柱建物群主体／82次から107次周辺／8世紀半ば前後)のように変遷すると考えられている。

本書報告の132次調査では大型側柱建物がみつかっており、88次調査区と一連のC群段階以降の東方建物群である。同じく本書報告の228次調査はこれらの北に位置するが、東西方向の1本柱櫛列がみつかっており、220次の櫛列との関係が注目される。これら一本柱櫛列はA群のそれとは方向を異にしており、88次や187次のような側柱建物を囲む区画をなすものであろう。東方建物群周辺はまだ調査が多くないが、ここを官人の居宅エリアとみる考え方もある。平成20年度調査の230次調査はA～C群建物が重複する重要な地点である。本書と併せて刊行される『有田・小田部48』では菅波正人氏が周辺の遺構変遷を詳しく整理しているので参照されたい。平成21年度調査では235次調査が注目される。133次・141次の近接地であり、A群の1本柱櫛列に伴う門がみつかっている。(森本)

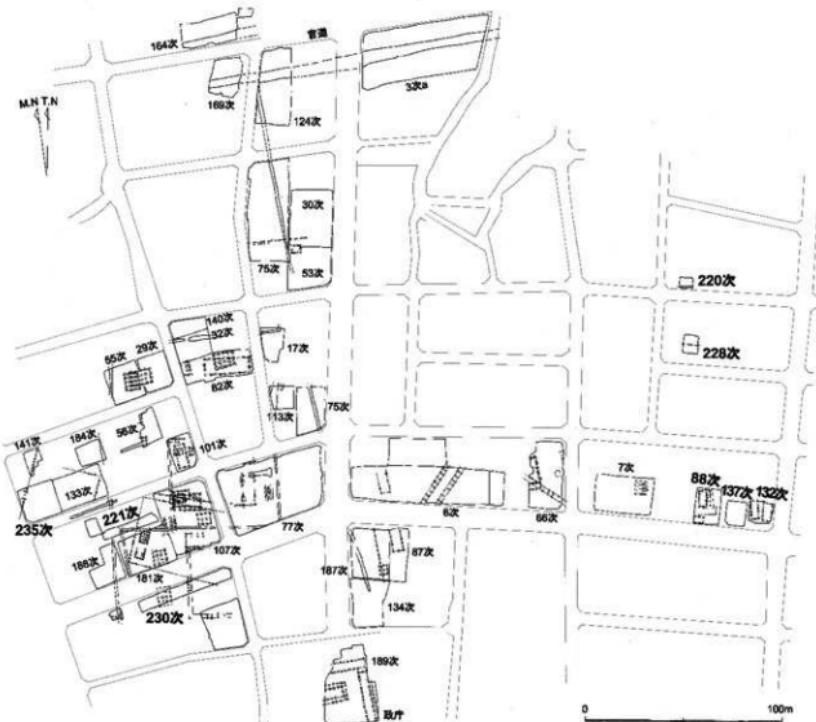
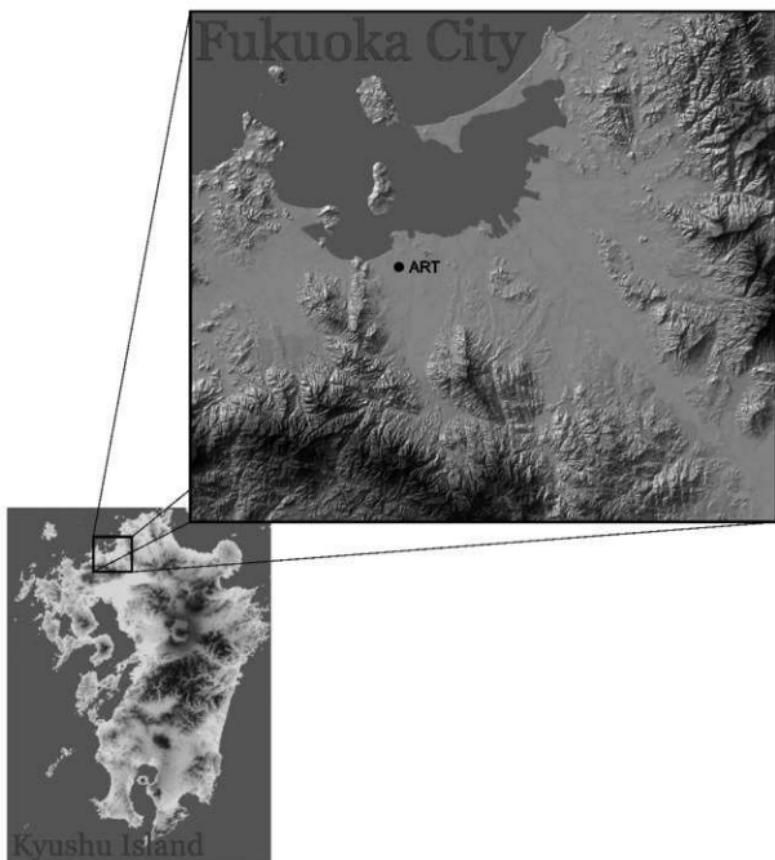


Fig. 有田遺跡群の古墳時代後期～古代の大型建物・櫛・区画溝 (1/2500)

第 232 次調査



例　言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成20（2008）年度に早良区小田部三丁目247番で実施した発掘調査報告書である。
- (2) 発掘調査は福岡市教育委員会が行い、調査担当者は加藤隆也である。
- (3) 遺構実測、写真撮影は加藤が行った。
- (4) 発掘作業は金子由利子、柴田勝子、柴田春代、平江裕子、石井清子が行った。
- (5) 出土遺物の整理作業は加集和子が行った。
- (6) 出土遺物の写真撮影は加藤が行い、浄書は加集が行った。
- (7) 本書に使用した方位は座標北（日本測地系）であり、今回の調査・報告に係るレベル値はL-134ベンチマーク（標高9.157m）を使用している。
- (8) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用していく予定である。

調査基本情報

遺跡調査番号	0 8 5 8	遺　跡　略　号	A R T - 232
地　　番	早良区小田部三丁目247番	分布地図番号	原　8 2
調査対象面積	832.75m ²	調　査　面　積	202m ²
調　査　期　間	平成21年2月17日～平成21年3月6日		

1. 位置と周辺環境

調査地は西福岡中学校の北側に位置しており、東西方向の道路に面している。現在、中学校が建てられている場所は、有田・小田部台地に複雑に入り込んでいる谷のひとつであり、現在も校舎は道路面より一段低く建てられている。そのことから調査地の立地は谷の北東側、つまり台地の南西斜面に位置していたと思われる。調査地の南側を東西方向に通る道路は、古代の官道跡と推定されている道路であり、東側約200mに位置する第124次、164次調査ではこの道路に平行して古代道路の側溝が検出されている。

2. 調査に至る経過

平成21年1月13日に、当該地における埋蔵文化財の有無の確認等の書類が埋蔵文化財第1課事前審査係に申請された。申請地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群内にあり、西側隣接地は第159次調査により古墳時代の竪穴住居や古代の建物跡が検出されており、北側隣接地は第186次調査により近世屋敷跡などが見つかっている。このような状況から2月6日に試掘調査を行い、柱穴などの遺構を確認した。協議の結果、発掘調査を行うことが決定された。調査は2月17日から表土剥削業を行い、3月6日に終了した。

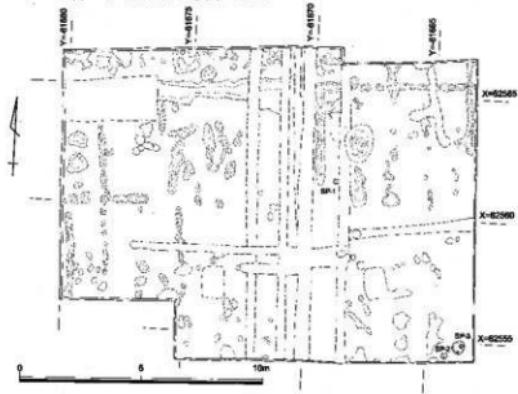
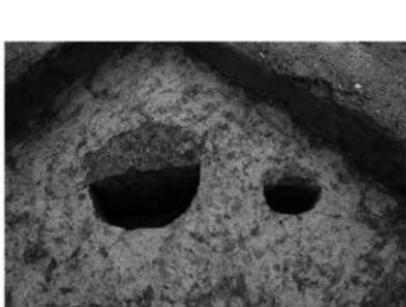


Fig. 1 調査区全体図 (1/200)



Ph. 1 調査区全景 (南から)



Ph. 2 遺構検出状況 (北西から)

3. 検出遺構と遺物

遺構検出面は、現地表下約3~40cmのローム層上面である。ローム層は部分的に赤褐色を呈しており、後世の削平が著しいことがうかがえた。検出された遺構は、埋土の差異から大きく2つに分けることができる。ひとつは、柱穴にみられる黒褐色粘質土と地山土が混ざった締まりのある土壤で埋まっているもの。もうひとつは、溝状遺構にみられる灰茶褐色砂質土の埋

土を主体とするものであった。周辺の既存調査の成果から、前者は古墳時代後期から古代頃、後者は近世以降に掘削されたものと考えられる。

4.まとめ

検出された遺構は柱穴、溝、土壤状のものである。特筆されるのは、調査区南東隅にて検出された直径約50cmの柱穴SP-3である。この柱穴は、西側の第159次調査でも検出されている古代の大型建物の柱穴であり、建物の範囲が東側にも展開することが明らかとなった。また調査区は、早良郡衙北側を通ると考えられている官道の推定ライン上に位置しているが、西側隣接地の第159次調査と同様に道路側溝の痕跡は見られなかった。

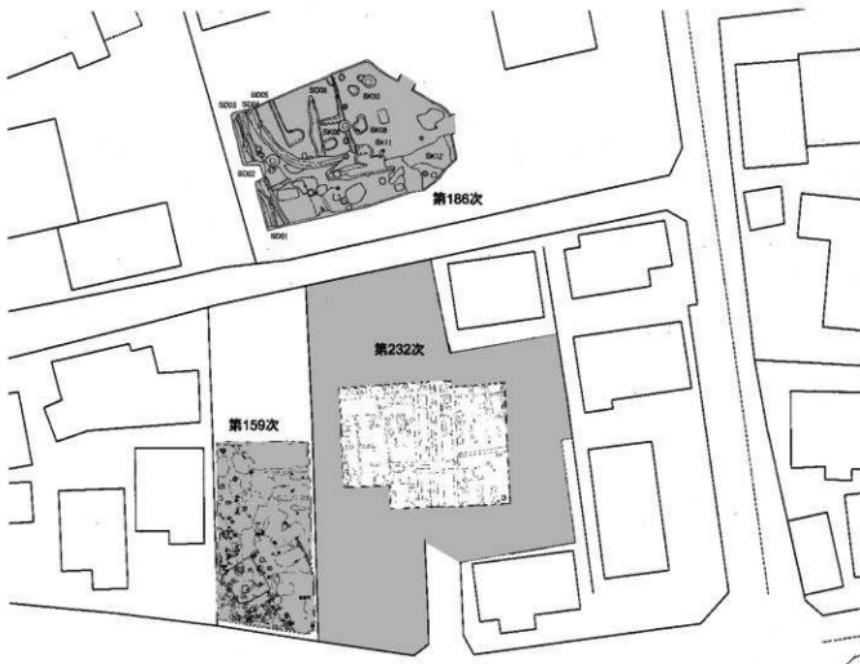


Fig. 2 調査区位置図 (1/500)

報告書抄録 1

書名	有田・小田部47			
ふりがな	ありた・こたべ47			
著書名	第132、137、221、223、228、229、231、232次調査の報告			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		シリーズ番号	第1067集
編著者名	山崎龍雄 加藤隆也 久住猛哉 木下博文 森本幹彦			
編集機関	福岡市教育委員会			
発行機関	福岡市教育委員会			
発行年月日	2010年3月23日			
住所・電話番号	〒810-8621	福岡市中央区天神1-8-1	TEL	092-711-4667
遺跡名	有田遺跡群			
ふりがな	ありたいせきぐん			
市町村コード	40132	遺跡番号	0309	
第132次調査				
地番	早良区有田1丁目8-3	調査面積	142m ²	調査原因
北緯	33度33分48秒	東經	130度20分15秒	個人住宅 建設
調査期間	1988.01.25~1988.03.03			
第137次調査				
地番	早良区有田1丁目8-4	調査面積	134m ²	調査原因
北緯	33度33分48秒	東經	130度20分15秒	個人住宅 建設
調査期間	1988.04.15~1988.06.06			
概要	132次調査は宅地であったため、遺構面は擾乱・削平を受けていたが、遺構は謹密に確認出来た。掘立柱建物5棟、上坑、ピットなどである。掘立柱建物は大型で、時期としては古代7世紀から8世紀の時期のものである。有田遺跡では早良都衙跡と思われる大型建物群が各地点で検出されているが、当地点の西側第88次調査区などでも確認されており、都衙関連施設があった可能性がある。出土遺物は弥生時代のものから見られるが、堅穴住居などの遺構は確認出来なかった。古代の建物建設に伴って削平された可能性がある。			
	137次調査は全面に包含層があり、包含層上面とその下のローム面の2面の調査となった。第1面では建物1棟と上坑などで時期は古墳時代～中世の時期。下層の第2面は建物、上坑、陶器・土器群などで、弥生時代中期～古墳時代である。陶器土器群は南側段落ちで確認され、丹塗り土器が多く含んでいたことから、祭祀遺構であった可能性がある。			

報告書抄録 2

書名	有田・小田部 47								
ふりがな	ありた・こたべ 47								
著書名	第 132、137、221、223、228、229、231、232 次調査の報告								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		シリーズ番号	第 1067 集					
編著者名	山崎徹雄 加藤隆也 久住猛雄 木下博文 森本幹彦								
編集機関	福岡市教育委員会								
発行機関	福岡市教育委員会								
発行年月日	2010年3月23日								
住所・電話番号	〒810-8621	福岡市中央区天神1-8-1	TEL	092-711-4667					
遺跡名	有田遺跡群								
ふりがな	ありたいせきぐん								
市町村コード	40132	遺跡番号	0309						
第 221 次調査									
地番	早良区有田 1 丁目31番5	調査面積	59.17m ²	調査原因					
北緯	33度33分47秒	東經	130度19分58秒	共同住宅 建設(切土 造成)					
調査期間	2006.01.06~2006.01.20								
第 223 次調査									
地番	早良区小田部 3 丁目204番2	調査面積	107.14m ²	調査原因					
北緯	33度33分53秒	東經	130度19分56秒	個人専用 住宅建設					
調査期間	2006.01.26~2006.03.10								
221次調査は有田遺跡群中央やや南側の段丘最高所の西側に位置する。調査区の大部分は南北に走行する中世末から近世の大溝が占める。その他、中世の溝状遺構と掘立柱建物を検出した。大溝は周囲調査と一連の溝であるが、調査区には幅広い溝の東半分があり、溝中央が深くなる。溝の肩と溝中央の間に幅3mの平坦面があり、この面で浅い溝状遺構やピット列ないし畝状遺構を検出した。あるいは道路痕跡の可能性がある。221次調査では本調査に先立ち、対象敷地の一部について確認調査を行っている。古墳時代後期～古代および中世の溝状遺構、掘立柱建物、礫層を検出した。これら確認調査で検出した遺構の一部は、周囲で確認されている官家（屯倉）ないし官衙衛巡遺構の一部となるものと考えられる。									
223次調査は有田遺跡群中央部の西側に位置し、北西に延びる段丘尾根支丘の北斜面に立地する。調査区は周囲道路とほぼ同レベルである。縄文時代～弥生時代前期、弥生時代終末期、古墳時代中期～平安時代の遺構と遺物を検出した。井戸は2基検出したが、一つは素堀り、一つは井戸側を伴う「陣下取水式」の可能性がある。遺物が僅少で時期が限定できないが、前者は古代、後者は弥生終末の可能性がある。古墳時代後期の堅穴住居にはカマドが遺存し、カマド廃絶時の祭祀が認められた。調査区の削平が顕著なため不明確であるが、堅穴住居の貼床痕跡の可能性がある範囲が散在した。堅穴遺構としたものがあり、一つは中世前半の、一つは古墳時代後期のものである。後者は細長い梯子形平面であり、墓なしし貯蔵施設の可能性がある。掘立柱建物がいくつか復元できた。時期が不明確だが、古墳時代後期～古代と中世のものがあろう。その他、遺構は不明確だが、縄文時代後期～発期、弥生時代前期・中期・終末期の遺物も認められた。									
概要									

報告書抄録 3

書名	有田・小田部47			
ふりがな	ありた・こたべ47			
著書名	第132、137、221、223、228、229、231、232次調査の報告			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		シリーズ番号	第1067集
編著者名	山崎徹雄 加藤隆也 久住猛雄 木下博文 森本幹彦			
編集機関	福岡市教育委員会			
発行機関	福岡市教育委員会			
発行年月日	2010年3月23日			
住所・電話番号	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1	TEL:092-711-4667		
遺跡名	有田遺跡群			
ふりがな	ありたいせきぐん			
市町村コード	40132	遺跡番号	0309	
第228次調査				
地番	早良区有田1丁目11-9	調査面積	71m ²	調査原因
北緯	33°33'51.1"	東經	130°20'13.3"	個人専用
調査期間	2008.06.02~2008.06.11			住宅建設
				弥生時代前期貯蔵穴、弥生時代中期住居址、古墳時代後期～古代の掘立柱建物、横列、戦国時代の区画溝
第229次調査				
地番	早良区小田部1丁目177-4	調査面積	26m ²	調査原因
北緯	33°34'8.4"	東經	130°20'1.5"	個人専用
調査期間	2008.06.16~2008.06.20			住宅建設
	228次調査は有田遺跡群東部に位置する。弥生時代前期の環濠集落や古代の官衙城からは少し外れるが、それらの時期の遺構を含む各時代の遺構や遺物がみつかった。			
	弥生時代前期の貯蔵穴からは板付II式の一括資料が出土した。また、遺構の遺存状況からは弥生時代中期前半の集落形成のために大規模な地下げが行われていることが予想される。7世紀後半の一本柱櫛列は約30m北に位置する220次調査地点の柱穴列と一連の区画を形成していた可能性がある。これまで注目されてきた官衙城からは東に外れるが、今後周辺での関連遺構の発見が期待される。戦国時代の遺構は調査区北端で東西方向の溝が検出されたのみである。周辺の調査では当該期の居館の区画をなす方形溝などがみつかっており、居敷地が展開していたと考えられるが、本調査区はその遺構密度の薄さから溝の南側が当該期の道路に当たると考えられる。			
	229次調査は有田遺跡群の北部に位置する。北西から南東方向に入る谷に面する東斜面に位置する。ピットを多数検出したが、調査区が狭小で遺物も極少量のため、その時期や性格を明らかにすることはできなかった。遺物は古墳時代～古代とみられるが、ピット覆土の様相からより新しい時期のものである可能性が高いと考えられる。			
概要				

報告書抄録 4

書名	有田・小田部47			
ふりがな	ありた・こたべ47			
副書名	第132、137、221、223、228、229、231、232次調査の報告			
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		シリーズ番号	第1067集
編著者名	山崎徹也 加藤隆也 久住猛雄 木下博文 森本幹彦			
編集機関	福岡市教育委員会			
発行機関	福岡市教育委員会			
発行年月日	2010年3月23日			
住所・電話番号	〒810-8621	福岡市中央区天神1-8-1	TEL	092-711-4667
遺跡名	有田遺跡群			
ふりがな	ありたいせきぐん			
市町村コード	40132	遺跡番号	0309	
第231次調査				
地番	早良区小田部1丁目216-1	調査面積	80.61m ²	調査原因
北緯	33°34'14"	東経	130°20'1"	個人専用
調査期間	2008.10.29～2009.11.10			
	柱穴			
第232次調査				
地番	早良区小田部3丁目247番	調査面積	202m ²	調査原因
北緯	30°33'56"	東経	130°19'59"	個人専用
調査期間	2009.02.17～2009.03.06			
	住宅建設			
231次調査は有田遺跡群北半部に位置する。掘立柱建物1を検出した。遺物は土師器・黒曜石の小片が出土している。				
232次調査では、堀立柱建物の柱穴を検出した。				
概要				

有田・小田部 47

－ 第132、137、221、223、228、229、231、232次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1067集

2010年(平成22年)3月23日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 株式会社ハザマ印刷
福岡市南区那の川1-20-23
☎ 092(521)5138